

パレーズ・エンド③ 男は立ち上がる \* 目次

主要人物一覧 vi

英国陸軍の階級と登場人物 x

第一部 1

第二部 69

第三部 239

訳者あとがき 294

訳注 315

男は立ち上がる

## 主要人物一覧

### ヴァレンタイン・ワノップ

クリストファー・ティージェンスの恋人。第一次大戦が進行するなか、ロンドン郊外の女学校で体育の教師を務める。

### ミセス・ワノップ

ヴァレンタインの母親。娘が、妻帯者であるクリストファー・ティージェンスに惹かれていることを心配し、二人に関係を持たないように迫るが、結局、二人の関係の仲立ちをすることになる善意の人。

### ミス・ワノストロフト

ヴァレンタインの務める女学校の校長。ヴァレンタインの父親を崇拜している。

### クリストファー・ティージェンス

妻のシルヴィアがルーアンに押しかけてきて引き起こされた騒動により、前線送りとなるが、後に、体調のすぐれないビル大佐に代わって大隊の司令官に就任、部隊同士の通信訓練を重視する方針を取る。敵の砲撃を受け、部下たちの救助に当たっているさなか、再びキャンピオン将軍が現れ、指揮権を取り上げられ、彼がもつとも嫌う役目の、

囚人の看守役を割り当てられる。戦争が終わるとグレイズ・インの部屋に戻ってヴァレンタインとの新生活に備える。

### シルヴィア・ティージェンス

クリストファーの妻であるが、何かにつけて夫を苦しめる。ルーアンでかつての浮気相手とクリストファーとの間に大騒動を引き起こし、その結果、クリストファーを前線送りにする。クリストファーとよりを戻したい気持ちをもちながらも、一方で、エドワード・キャンピオン將軍にも擦り寄り、クリストファーと別れた後、その妻の座を約束させる。

### エドワード・キャンピオン

クリストファーの父親の友人で、名付け親。ルーアンの基地で最高司令官を務める職業軍人であるが、そこで騒動を起こしたクリストファーとペローンとマツケクニーを同じ列車で前線送りにする。本国の陸軍省に働きかけ、英仏の単独指揮が成ると、その部隊を率いるためにティージェンスのいる前線にやって来る。

### ヴィンセント・マクマスター

クリストファー・ティージェンスの両親が面倒を見てきた、クリストファーとは兄弟のような関係の人物だが、現在は妻のイーデイス・エセルの尻に敷かれ、クリストファー

に借金を返さずに済む算段を考える。

### イーデイス・エセル

夫のヴァインセント・マクマスターがクリストファー・ティージェンスに多額の借金をしているため、ティージェンスが無事に戦争から戻ってきて、借金の返済が求められることを恐れている。

### マッケクニー大尉

クリストファーの親友であったヴァインセント・マクマスターの姉の子であり、オックスフォードで副学長のラテン語賞を受賞したことがある。クリストファーと同様、ルーアの基地で大尉であったが、前線では輜重隊しちゆうたいの将校となり、ティージェンスの大隊にもやって来る。ティージェンスとの間で始めた、ソネットの執筆・翻訳の時間競争は最後まで続く。

### ペローン少佐

ルーアンで、シルヴィアにホテルの鍵を開けておくように懇願し、夜中に忍んでいくことで大騒動を起こし、前線送りになった結果、すぐに砲弾に当たって落命する。

## ビル大佐

クリストファー・ティージェンスが送られた前線の大隊の司令官。腋の下に癌ができているが、医務官の出す薬を飲むのを拒み、ティージェンスに大隊の指揮を託す。

## アランジユエ

ティージェンスの部隊の少尉。母方の大伯父がポルトガル北西部のオポルトの司教座聖堂参事会員で「夜に寄せるソネット」の作者であるという。バイユールに恋人がいる。爆撃で吹き飛ばされ、片目を失う。

## ダケット

ティージェンスの部隊の兵長。クリストファーにヴァレンタイン・ワノップを思い出させる風貌をしている。爆撃で吹き飛ばされ、土砂に埋もれる。

英国陸軍の階級と登場人物

( ) 内は初出ページ

士官 (Officers)

元帥 (Field Marshal)

大将 (General)

中将 (Lieutenant-General)

少将 (Major-General) エドワード・キャンピオン (34)

大佐 (Colonel) ユル (125)

中佐 (Lieutenant-Colonel)

少佐 (Major) ペローン (11)、ジエラルド・ドレイク

大尉 (Captain) クリストファー・ティージェンス (後に少佐に昇進) (58)、マッケ

クニー (88)、ギブス (206)、ノッティング (副官) (187)

中尉 (Lieutenant) コンスタンティン (85)、ハケット (160)

少尉 (Second Lieutenant, Subaltern) アランジューエ (95)

その他の階級 (Other Ranks)

一等准尉 (Warrant Officer Class 1)

二等准尉 (Warrant Officer Class 2)

特務曹長 (Sergeant Major)

軍曹 (Sergeant) カッツ (186)  
伍長 (Corporal) コリー (110)  
兵長 (Lance Corporal) ダケット (166)  
兵卒 (private) 64 スミス (156)、09 グリフィス (105)、  
ヨット (226) ラント (117)、コックシ

## 一章

街路からも、音がひどく反響する大きな運動場からも、耐え難いほどの騒音が聞こえるなか、校舎の奥深くからのんびりと鳴り始めた電話は、ヴァレンタインには——数年前にはよくあったことだが——究め難い運命の超自然的道具立ての一部のように感じられた。

電話機は、何故か巧みに精神的苦痛を与えるように、これ見よがしに大きな教室の隅に置かれ、ヴァレンタインは自分が指揮する何列にも並んだ女の子たちが電撃を受けたかのように押さえが効かなくなつて立つ運動場から、かなり不安な精神状態のまま高圧的に呼び出され、受話器に耳を当てたが、そこからは、たちまち、聞き覚えがあるような、ないような声が発せられて、理解不能な知らせが突きつけられた。ちようど話の真ん中から、その声は彼女に叩きつけられたのだつた。

「……おそらく彼を押さえつけないといけないわね。あなたにはお気に召さないかもしれないけれど」その後でまた雑音が激しくなり、声が聞き取れなくなった。

この瞬間、おそらく世界中の全人類が押さえつけられる必要があるのではないかとヴァレンタインは考えた。自分自身を押さえつけておく必要があることも分かっていた。彼女にはこの判断

を下し得る男の親戚は特に一人もいなかった。弟はどうだろう？ 弟は掃海艇に乗っていた。現在、船はドックに入っている。今や…永遠に安全だ！ 会ったこともない年取った大伯父もいた。どこかの大聖堂主任司祭だった。…ヘレフォード<sup>①</sup>だったか、エクセター<sup>②</sup>だったか。…どこかの…でも今、自分で安全だと言ったではないか。彼女は歓喜に身を震わせた。

ヴァレンタインは受話器の送話口に向けて言った。

「こちらはヴァレンタイン・ワノップです。…この学校の体育の教師ですが」

彼女は平静を装わなければならなかった。…少なくとも平静な声を！

電話の声は、誰だか思い出せそうで思い出せないもどかしさを感じさせたが、今ではそれにさらに多くの不可解が加わっていた。洞窟のなかから聞こえてくるような、いらだって異常に早口になったような、唾を飛ばすほどに激しい「歯擦音」を誇張する声だった。

「お兄さんが肺炎にかかっているのだけれど、愛人でさえ面倒を見られずにいるのよ…」

その声が消え、それからまた現れた——

「二人は今、親しい関係だと言われているわ」

その後、長い間、運動場から聞こえてくる少女たちの甲高い声の波に、むせび泣くような工場の警笛のうねりに、互いに踵<sup>かかと</sup>を接してやってくる無数の破裂音の合間に、その声は飲み込まれていった。いったい彼らはどこで爆発物を手に入れたのだろう。学校のまわりの、むさ苦しい郊外の街の住人たちは。さらに言えば、どこでそんなぎよつとするような騒音を立てる勇気を手に入れたのだろう。茶褐色の家に住む、一見したところ帝国の住民とは言えないような、あまりに活気のない人たちだというのに。

鋭い歯擦音を立てる電話の声は、恨みがましく吐き捨てるように言葉を続けた。ポーターが家具などまっただくなかったと言っていたと。家のなかの男はポーターをポーターだと認めようともしなかったのだと。まゆつばにも聞こえるその情報の数々は、外からの騒音によって半ばかき消されたが、発言の内容によって相手に痛みを与えようと目論むかのような声で発せられたのだ。た。

それにもかかわらず、それは愉快な気分を受け取らずにはいられない話だった。何マイルも何マイルも離れた外の世界では署名がなされたに違いなかった——数分前に。彼女は、広大な前線で、むつつきりとして不機嫌な大砲が最後の音を発しているところを想像した。

「まったく分かりませんわ」ヴァレンタイン・ワノップが送話口に向かつてがなりたてた。「どんな要件で、あなたがどなたなのか」

ヴァレンタインには一つの称号が聞き取れていた。：何とか令夫人。：プラスタスだったかもしれない。学校の女性理事の一人が、吉日を祝うためにスポーツ大会を組織させようとして、何かを命じたいに違いないと彼女は想像した。女性理事の誰かが、いつでも何かを祝うために学校が何かすることを望んでいた。きつとユーモアのセンスがない——まったくユーモアのセンスがない——校長が、三十分間我慢強く話を聞いた後で、この称号を持つ女性にヴァレンタイン・ワノップのことを話したに違いなかった。校長は皆が息を切らして立つ運動場に人を遣って、ミス・ワノストロフトが——つまり件の校長のことだが——あなたに話を聞いてもらいたいらしい人から電話がかかってきているという話をヴァレンタインに伝えさせたのだ。：だとすれば、ミス・ワノストロフトはその称号をもった、今は識別不能な女性の話を理解することができ

たに違いなかった。しかし、もちろんそれは十分前のことだった。…発煙砲か警報か、どちらか区別がつかない轟音が、鳴り響く前のことだった。…「ポーターに向かって、家具など何もないとやったのよ。…ポーターだと認めようとさえしなかったのですからね。…しつかり取り締まるべきだわ！」ヴァレンタインの頭はこうして（暫定的ながら）ブラスタス令夫人からの情報を再度捉えることができた。今度は、学校が自分を体育の教師として雇う前にここにおいて、老齢で引退した訓練係軍曹のことをこの婦人は心配しているに違いな思った。ヴァレンタインはポーターの黒い制服の上にくつかのりボン章をつけた高齡で尊敬すべき、もごもごと話す紳士を想像した。おそらく救貧院に入れられたのだ。学校の理事たちによって。きっと家具は質に入れさせられて…。

強烈な熱がヴァレンタイン・ワノツプにとりついた。実際、彼女は自分の目が閃光を発するのではないかと想像した。それはこのときだっただろうか。

彼女には人々が発したのが発炎砲なのか、高射砲なのか、警報なのかさえ分からなかった。それは発せられた——何であれ騒音が——彼女がこの不愉快な電話に出るために地下の通路を通じて運動場から教室に戻ってくる間に。それで彼女はその音を聞かなかつた。世界の耳が何年もの間、一世代の間、待ち望んでいた音を彼女は聞き逃してしまった。永遠に。何の音もなかつた。運動場から出て行くときには完全に静まり返っていた。皆が待っていた。女子生徒たちはゴムの靴底でもう一方の足首を擦っていた…。

今後…残された生涯の間、彼女はそれを待っていた何万人もの人が知った最大の刺すような歓喜を決して思い出すことはないだろう。それを思い出せないような人間は自分以外、誰もいない

だろう。：おそらく、それは刺すような興奮であり、おそらくは、炎を飲むような出来事だった。それはもう終わりを告げていた。今では、皆がある種の状況に置かれていた。ある種の方法によって——ある種の事柄に影響を与えるような事態だった。

元訓練係軍曹と推定される男には肺炎にかかった兄がいて、同様に役に立たない愛人がいることを、ヴァレンタインは思い出した…。

彼女はこうつぶやきそうになった。

「これがまさにわたしの運命なのだわ！」そのとき彼女は自分の運命がまったくそんなものでなかったことを嬉しくも思い出した。概して彼女は幸運だった。——山あり谷ありの人生だったが！一時は大きな心配もあった。——でも、そうでない人なんていなかった！とにかく自分は健康だし、母も健康、弟は無事である。：さまざまに不安はある、確かに！でも、そんなにひどい状況になったことは一度もなかった…。

ならば、これは例外的な不運なのだ！これは前兆ではないのか——自分の将来がうまくいかないという意味の。自分がなにか普遍的な経験を逃してしまうだろうという意味での。例えば、結婚しないとか、出産の喜びを知らないとかといった。出産が喜びだと仮定しての話だが！そうかもしれないし、そうでないかもしれない。どちらとも言える。いずれにせよ、自分が普遍的な、必要不可欠な経験を逃してしまうという前兆なのではないか。カルカッソンヌを見ずして、とフランス人が言うような。：多分、自分が地中海を見ることはないだろう。地中海を見たことのない人間が、ちゃんとした人間であるはずがない。ティブルスの海、名詩選の編者の海、サッポロ<sup>⑤</sup>の海でさえもある。：青い、信じがたいほどに青い海！

今、人々は旅行することができる。信じがたいことだ。信じがたい！ 信じがたい！ でも、できるのだ。来週にでも、行くことができるだろう！ タクシーを呼ぶことができる。それでチャリングクロスまで行く。そしてポーターを呼ぶ。あらゆる荷物を運んでくれるポーターを。：そして翼を、鳩の翼を手に入れる。そしてわたしは飛び去る。飛び去って、レキット社の青色洗濯着色材が入った、計り知れない大きさの洗濯盥（6）の傍らで、柘榴（ざくろ）を食べる。信じがたいが、自分はそのことができるだろう。

ヴァレンタインは再び十八歳になったように感じた。自信過剰な！ 以前、女権運動家たちの集会で邪魔する人たちに叫び返すのに使っていた良質な金属製の盥のようなロンドンっ子の肺を使って：彼女は臆面もなく電話の送話口に向かって大声をあげた。

「いいこと！ あなたがどなたであれ、彼らはそれをやったと思うわ。発煙砲や警報でああなたの側にそれを告げたわけではありませんこと？」彼女は三回それを繰り返した。ブラスタス令夫人だかブラスト令夫人だかのことは気にも留めなかった。自分はこの古い学校を去って、オデュッセウスの妻ペネロペイア（7）が洗濯をした岩陰で柘榴の実を食べるのだ。青い水が激しく打ちつけるなかで。あの地域では海の色で肌着は皆、青く染まるだろうか。自分にはできる！ 自分にはできる！ 自分にはできる！ 母と弟と一緒に、皆が：ああ、新しいジャガイモを！：：：食べられるところへと出かけて行く。十二月には海は青くなる。：人魚たちはどんな歌を歌い、そして：」

何という名の貴婦人への敬意であれ、わたしはもう二度と示さない。自分は働かなくても暮らしていける資力をもった女性だけれど、これまでは、学校に、そして女性教師たちを抱えるワノ

ストロフトに被害を与えないために、敬意を示さなければならなかった。：今は誰に対してであれ、もう二度と敬意を示すつもりはない。自分は辛い目にあつてきた。世界全体が辛い目にあつてきた。もう敬意などありえない！

彼女も予期したかもしれないが、その後すぐさま彼女はこつぴどい叱責を受けた。生意気だと！

歯擦音を立てる電話からの苦々しい声が、彼女が聞きたくない唯一の住所をはつきりと発音した。

「リンカンズ：ズズ：ズイン」

罪因：悪魔のごとし！

心にグサツときた。

残酷な声があった。

「そこから話しているのよ」

ヴァレンタインは勇気を持って言った。

「ええ、今日は偉大な日ですもの。あなたもわたしと同様、歓声に悩まされているのね。おっしやっていることが聞き取れないわ。構いません。歓声を上げさせておきましょう」

ヴァレンタインはそんなふうに感じていた。それがいけなかった。

声があった。

「あなたはカーライルのことを覚えているわね……」

それはまさに彼女が聞きたくないことだった。受話器に耳をきつく押し当て、彼女は大きな教

## † 著者

フォード・マドックス・フォード (Ford Madox Ford)

1873年生まれ。父親はドイツ出身の音楽学者 Francis Hueffer、母方の祖父は著名な画家 Ford Madox Brown。名は、もともとは Ford Hermann Hueffer だったが、1919年に Ford Madox Ford と改名。

多作家で、初期にはポーランド出身の Joseph Conrad とも合作した。代表作に *The Good Soldier* (1915)、*Parade's End* として知られる第一次大戦とイギリスを取り扱った四部作 (1924-8)、1929年の世界大恐慌を背景とした *The Rash Act* (1933) などがある。また、文芸雑誌 *English Review* および *Transatlantic Review* の編集者として、D.H. Lawrence や James Joyce を発掘し、モダニズムの中心的存在となった。晩年はフランスのプロヴァンス地方やアメリカ合衆国で暮らし、1939年フランスの Deauville で没した。

## † 訳者

高津 昌宏 (たかつ・まさひろ)

1958年、千葉県生まれ。慶應義塾大学文学部卒業、早稲田大学大学院文学研究科前期課程修了、慶應義塾大学文学研究科博士課程満期退学。現在、北里大学一般教育部教授。訳書に、フォード・マドックス・フォード「パレーズ・エンド」①『為さざる者あり』(論創社、2016)、同②『ノー・モア・パレーズ』(同、2018)、『五番目の王妃 いかにして宮廷に來りしか』(同、2011)、『王璽尚書 最後の賭け』(同、2012)、『五番目の王妃 戴冠』(同、2013)、ジョン・ベイリー『愛のキャラクター』(監・訳、南雲堂フェニックス、2000)、ジョン・ベイリー『赤い帽子 フェルメールの絵をめぐるファンタジー』(南雲堂フェニックス、2007)、論文に「現代の吟遊詩人——フォード・マドックス・フォード『立派な軍人』の語りについて」(『二十世紀英文学再評価』、20世紀英文学研究会編、金星堂、2003) などがある。

## パレーズ・エンド③ 男は立ち上がる

---

2019年7月20日 初版第1刷印刷

2019年7月30日 初版第1刷発行

著者 フォード・マドックス・フォード

訳者 高津昌宏

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1846-7 ©2019 Printed in Japan